

「総合的な学習の時間」における観光戦略を題材とした単元開発：地理学習との接続・連携を目指して

著者	菊地 達夫
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報
巻	9
ページ	97-101
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002605/

研究報告

「総合的な学習の時間」における観光戦略を題材とした単元開発 ー地理学習との接続・連携を目指してー

菊地 達夫

北翔大学短期大学部こども学科

抄 録

本報告では、中学校・高等学校における「総合的な学習の時間」のあり方に注目し、地理学習との接続・連携を目指しつつ、「総合的な学習の時間」における観光戦略計画を題材とした単元開発を行う。

具体的には、地理学習において身近な地域（江別市）の調べ学習に取り組み、その後、「総合的な学習の時間」において、他地域（札幌市・小樽市）との比較（観光資源・観光客の入り込み数）を行う。最後に、その学習成果をもとにストーリー性（周遊・連携型）のある観光戦略計画の立案へつなげる単元構想を開発した。

キーワード：「総合的な学習の時間」、観光戦略計画、地理学習、関係性、単元開発

I. はじめに

現在、学校教育は、次期学習指導要領の告示（小学校・中学校）、高大接続改革などをはじめ、多様な変革期にある。平成29年に入り、その全貌が少しずつ、明らかにされつつある。学習活動のあり方では、知識理解と思考力・判断力・表現力の両輪を通じて、いかに向上させることができるか、注目されている。加え、資質・能力の3つの柱として、「学びに向かう力・人間性等」も示された。とりわけ、2015年のPISA調査では、読解力が、前回（2012年）の結果から、順位を下げ8位（前回4位）に後退した。よって、思考判断する能力を、やや苦手とする実態が浮き彫りとなった。この解決の一つとして、「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）の学習活動が期待されている。現行課程の場合、改善の基本方針として、知識基盤社会に備える重要な役割を果たす学習活動と位置付けられている。

周知のとおり、総合学習は、小学校3年生以上から高等学校までに設定された領域の一つである。学習目標（中学校新学習指導要領 平成29年告示）をみれば、「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す」（1）探究的な学習の過程において、課

題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。（2）実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。（3）探究的な学習の主體的・協動的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う、を示した。次期学習指導要領では、探究的な見方・考え方をより強調した点が、総合学習の一つの特徴となっている。

先行研究として、総合学習とりわけ観光をテーマとした学習内容は少ない。観光の教材化は、社会科や地理学習であるものの、まだまだその数は限られている。例えば、寺本（2017）では、小学校社会科の第5学年の「産業を支える情報のかかわり」として観光を教材化し、その内容を実践検証した。その授業の特色として、産業を支える視点から地元の観光情報を多角的にとらえさせ、情報化の進展にともなう産業の発展や国民生活の向上について自分の考えを持つよう促した点にある。

また、菊地（2016）では、中学校地理と総合学習の接続・連携を目指し、歴史的建造物群を活用した授業開発を行った。その中で、総合学習において、歴史的建造物群を活用して、いかに持続可能な観光開発を実現できるか、未来軸の視点に注目した。具体的には、生産価値、景観価値、文化価値、歴史的価値、教育的価値、観光・

交流価値、環境保全価値、広報価値といったキーワードから保存と観光を対峙し、思考させようとするものであった。このように観光が多岐にわたることを考えると、総合学習における教材化が、もっと必要となろう。

そこで、小稿は、中学校・高等学校における総合学習のあり方に注目し、地理学習との接続・連携を目指しつつ、総合学習における観光戦略計画を題材とした学習の単元開発を行う。観光戦略計画は、その前提として観光産業や観光資源を基礎知識（社会科・地理教材）とし、それらを総合的に取り扱うことができる学習場面であり、総合学習としての教材化が適切と考えた。なお、次期学習指導要領では、高等学校の場合、「総合的な探究の時間」や「探究の時間」といった名称に改める案が出ているが、現行課程における総合学習のまま小稿では統一する。

Ⅱ. 総合的な学習の時間の役割と課題

本章では、総合学習の内容やその変化を確認する。具体的には、田村・原田（2010）の研究成果を手がかりに整理していきたい。

総合学習の創設は、平成8年の中教審における「生きる力が全人的な力であるということ踏まえると、横断的・総合的な指導をいっそう推進しようとする新たな手立てを講じて、豊かに学習活動を展開していくことがきわめて有効であると考えられる」として「総合学習」の設置を提言したことによる。

第1期の実施状況をみれば、一定の成果があるものの、以下のような課題が散見された。具体的には、「当初の趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない」「学校間の取組の重複」「補充学習のような特定の教科の知識・技能の習得を図る活動」「運動会をはじめとする特別活動の準備」といった課題が浮き彫りとなった。

これらの課題を踏まえ、第2期の改訂ポイントとして5点示した。それは、(1)趣旨および性格の明確化、(2)探究的な学習としての充実、(3)教育課程上の位置付けの明確化、(4)学校段階間の連携、(5)体験活動と言語活動の充実といったものである。

(2)の場合、教科学習は、知識や技能の習得、その活用するものとし、総合学習は、実際に課題を探究する場と位置付け区別した。また、具体的な学習する姿として、①課題の設定（体験的な活動を通して、課題を設定し課題意識をもつ）、②情報の収集（必要な情報を取り出したり収集したりする）③整理・分析（収集した情報を、整理したり分析したりして思考する）④まとめ・表現（気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する）流れを示した。さらに、探究の質を高めるた

め、協同的な言語活動、体験活動も示唆している。とりわけ、探求的な学習は、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動である点を強調している。

(4)の場合、育てたい力の視点を例示した。その例示として、「学習方法に関すること」「自分自身に関すること」「他者や社会とのかかわりに関すること」を挙げた。また、小学校では、地域の人々の暮らし、文化と伝統に関する学習活動、中学校では、職業や自己の将来に関する学習活動を例示として追記した。

他方、存続意義として、2点指摘されている。一つは、児童生徒が、現実の社会や自然環境に目を向け、自らの課題を見付け、主体的に問題解決する学習活動の場面を確保した点である。二つは、各学校の判断で地域の学習素材や人材等が積極的に活用されるようになった点である。

また、評価方法として、方法知において評価基準を設定しつつ、内容知においてそれを設定せず、学習の始まりを基準とした考え方の有効性に触れている。内容知の場合、伸びたところ、変容したところを中心に評価する。

次期学習指導要領では、探究的な学習を重点化している。他方、総合学習では、現行課程において、すでにその点を強調し重視している。そのように考えると、次期学習指導要領において、総合学習が、探究的な学習の先導役を担うに相応しい。

Ⅲ. 観光戦略計画を題材とした単元構想

1. 観光を題材とした学習の意義

寺本（2016）によれば、観光を題材にした学習は、大きく3つに分けることができる。具体的には、①観光地に関する地理、歴史、自然、経済、安全の情報に関する学習、②周遊型・滞在型の観光プログラム（旅程）の作成に関する学習、③ホスト型としてのホスピタリティの醸成に関する学習である。また、観光教育で育つ能力について、思考力、判断力、表現力に分け示した。思考力では、自県が観光で盛んである事実を理解し、自分なりにその理由について考える力、「非日常」「観光地」「ホスピタリティ」等の観光現象を表す言葉や観光地形成、ツアー等の観光概念を元に考え説明できる力、実社会で見出せる事実を根拠として予想できる力、筋道を持って考えをまとめる力を挙げている。判断力では、旅程の選択や旅行計画、課題を立案・判断できる力、学習問題「どの観光ルートがより人気を集めるだろうか？」を判断する力、比較したり関係づけたりしながら、よりよい

観光行動や観光地選択を判断、選択できる力を挙げている。表現力では、「よりよい観光地づくりに向けたパンフレット制作」や「世界遺産の魅力を県外の観光客に対して伝える」力、伝える相手を意識した上で情報を記録・整理し加工・処理・可視化できる力、自分なりの方法で意想を伝える力を挙げている。

授業展開では、社会科を経て総合学習へつなげる学習活動を提案している。社会科は、観光資源、観光動向を教材内容としており、地理的、歴史的、公民的なアプローチが必要なことを指摘している。とりわけ、社会認識をもとにした問題解決力の育成ができる点を強調する。また、接遇や旅の安全、観光戦略、観光まちづくりの内容の場合、総合学習での取り扱いが望ましいことに触れている。さらに、学習方法として、プロジェクト型の活動が効果的であることも挙げた。

以上から、総合学習の単元開発を行う場合、教科学習との接続・連携の視点を盛り込むことが重要と判断できる。

2. 単元構想

単元構想では、まず、地理学習において身近な地域の調査を行い、自然的事象と人文的事象の存在（観光資源）を明らかにする。それをふまえ、総合学習において、事例地（江別市）と周辺地（札幌・小樽）において、観光実態、観光客の入り込み数を比較する。続いて、有力な観光資源をそれぞれ抽出し、どのような違いがあるか整理する。その結果より、江別と札幌・小樽の観光資源の関係性を探り、どのような観光戦略が有効か、思考提案しようというものである。

具体的な課題として、「なぜ、札幌、小樽には、観光客の入り込み数が多いのか」、「他方、江別には、なぜ少ないのか」、「江別に、観光客を誘引するには、どのような方法が考えられるか」などが挙げられる。まず、第1段階として、観光客の入り込み数の結果から、なぜ、多少が生じるのか、を考える。観光客入り込み数は、人口規模に比例するわけではない。とりわけ、小樽と江別をみれば、大きな格差がある。どのようなことが、原因なのか、観光資源を比較しながら検討する。

第2段階として、その検討結果をふまえ、それを解決できるような手段を探究する。その手がかりとして、札幌や小樽を訪れる観光客は多いので、その観光客をいかに江別に誘引できないか、注目させる。

観光戦略としては、江別と札幌・小樽との観光資源の関係性に気付かせたい。そのあり方として、周遊型と単発・連携型を想定できよう。周遊型は、一つのテーマを柱に、札幌、小樽、江別を巡るものである。連携・単発型は、札幌や小樽に存在するものを起点とし、その関係

性から江別へ呼び込むものである。

例えば、周遊型では、地域食材を利用したの食べ歩き観光を想定できる。札幌の場合、道内産の農畜水産物を広く扱っているものの、小樽では、水産物（例：寿司）、江別では、農業（例：小麦）、酪農（乳製品）が有名である。よって、食を介して比較しながら巡ることができよう。

また、連携・単発型では、レンガ建築物の見学を想定できる。レンガ建築物は、札幌の場合、サッポロビール工場跡、小樽の場合、手宮機関区が残存する。そのレンガ製造の拠点が江別である。よって、レンガをテーマとして、その生産の場（レンガ工場跡）へつなげる仕組みを構築できよう。

以上から、地理学習で調査した地域的特色（観光資源）をもとに、その情報を活かしながら比較検討し、観光戦略を思考判断していく学習活動は、まさに探究的と判断できる。

3. 授業開発の意義

授業開発の意義は、地理学習の成果をふまえ、具体的に活かす総合学習の単元構想を示した点にある。とりわけ、中学校や高等学校の地理学習では、身近な地域の調査を実施するようになっている。それを通じて、身近な地域の特徴が明らかにされる。学習者は、身近な地域の地理的事象を調べる過程で、どのような点に魅力があるか、認識していく。身近な地域の観光戦略を考えた場合、その対象となる地理的事象（観光資源）が、いかなるものか、理解していなければ、他者へ魅力を語ることはできないであろう。

さらに、単元構想では、他地域との比較を通じて、身近な地域の観光実態を認識し、その上で、他地域と共存できるような観光のあり方を模索するよう方向付けた。

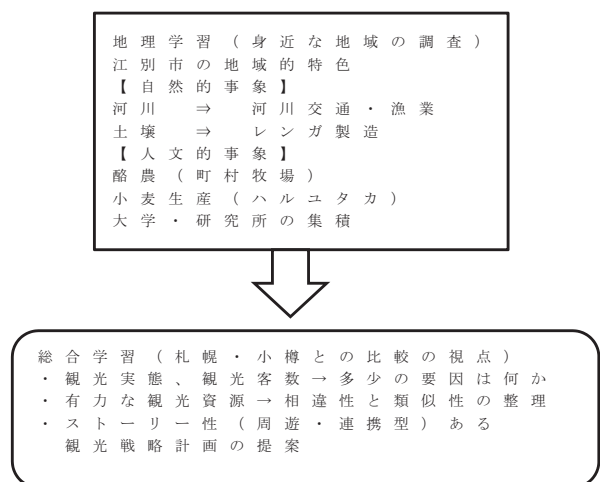
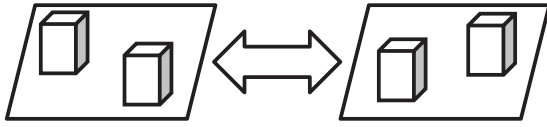
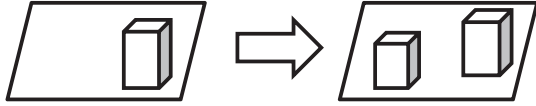


図1 地理学習と総合学習の接続・連携の内容

周遊型（面＋面）



単発・連携型（点＋面）



連携・単発型（面＋点）

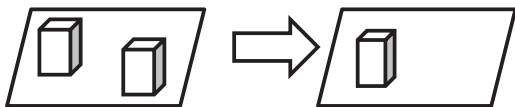


図2 ストーリー性ある観光戦略計画の形態

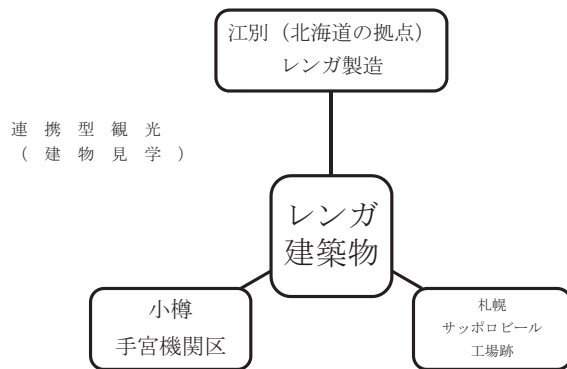


図3 連携・単発型観光の具体例

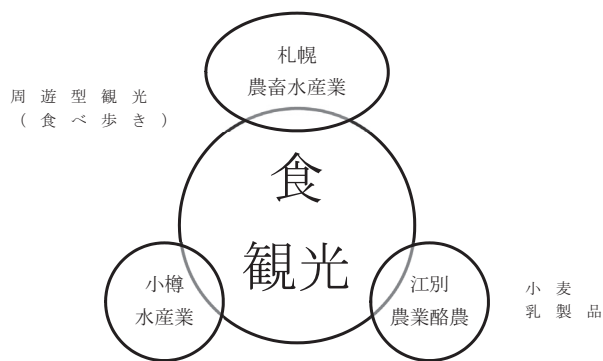


図4 周遊型観光の具体例

こうした試みは、単なる他地域との差別化を目指すものとは違い、他地域と共存しながら、いかに持続可能な観光開発を実現できるか、考える上で有益となろう。

●単元目標（学習方法に関すること）

江別に観光客を誘引するストーリー性ある観光戦略計画を考え、提案することができる。

●単元構成

	主な学習活動	指導上の留意点
①課題の設定 1時間	<ol style="list-style-type: none"> 1 町村牧場（江別）、時計台（札幌）、小樽運河（小樽）の写真を提示し、どこかを予想する。 2 江別、札幌、小樽の観光客の入り込み数の実態を比較する（提示資料）。 <ul style="list-style-type: none"> ・札幌と小樽が多い。 ・江別は少ない。 3 なぜ、観光客の入り込み数に多少が生じるのか（課題設定）。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 予想した都市名を出した後、どのような用途の建造物か、追加発問する。 2 小樽と江別は、札幌の隣接都市であり、観光客の入り込み数の格差を確認する。
②情報の収集 1時間	<ol style="list-style-type: none"> 1 札幌、小樽、江別の観光リーフレット等を手がかりに、どのような観光資源があるか、情報収集し、整理をする。（提示資料） 	<ol style="list-style-type: none"> 1 観光資源として、建造物、食べ物など、ある程度の対象を絞り込む。
③整理・分析 2時間	<ol style="list-style-type: none"> 1 札幌、小樽、江別の観光資源に、どのような地域的特色があるか、整理する。 2 改めて、なぜ、観光客の入り込み数に多少が生じるのか考える。 3 観光客を誘引するための仕掛けを考える。札幌、小樽の観光客をどのようにすれば江別へ誘引できるだろうか、気付かせる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 ②で絞り込んだ観光資源について、各都市のものを列挙し、相違性や類似性を確認する。 2 観光資源の知名度は、どのようなことで、影響をうけるか、考えさせる。 3 観光資源の関係性が必要なことに気付かせる。
④まとめ・表現 2時間	<ol style="list-style-type: none"> 1 江別と札幌市（小樽市）を周遊・連携しながらストーリー性ある観光戦略計画を思考・提案する。また、整理した観光資源を効果的に用いる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 関係性の構築の手法として、周遊型や連携型などがあることを助言し、思考・提案を支援する。

提示資料（例）

表1 平成28年度観光客入り込み数

単位：千人

	小樽市	札幌市	江別市
入込総数	4047.3	8807.9	748.8
内道外客	1582.2	2699.4	23.7
内道内客	2465.1	6108.5	725.1
内日帰客	3652.4	5484.5	747
内宿泊客	394.9	3323.4	1.8
宿泊客延数	460.7	6236.7	2.6

資料）平成29年3月北海道経済部観光局資料。

提示資料（例）

表2 小樽市・札幌市・江別市の主な観光資源

	みる（主な見学場所）	主な食
小樽市	小樽運河 天狗山 小樽水族館 JR小樽駅	寿司
札幌市	大倉山ジャンプ競技場 藻岩山 さっぽろ羊が丘展望台 JRタワー展望室 さっぽろテレビ塔 大通公園 モエレ沼公園	ラーメン スープカレー ジンギスカン
江別市	江別セラミックアートセンター エブリ（旧レンガ製造工場跡） 旧 町村牧場	江別小麦 ハルユタカ 八つ目うなぎ

資料）各都市の観光協会HP。

●評価基準

【方法知】

- ・3都市の観光客の入り込み数，観光資源の情報を収集し，比較検討できる。
- ・江別と札幌（小樽）をつなぐストーリー性ある観光戦略計画を提案できる。

【内容知】

- ・3都市の観光客の入り込み数，観光資源の実態を理解できる。
- ・3都市の観光資源の関係性について理解できる。

IV. お わ り に

小稿では，中学校・高等学校における総合学習における観光戦略計画を題材とした単元構想を開発した。

以下では，単元構想の新規性や有効性を示しつつ，今後の課題を述べる。

新規性は，地理学習の成果を具体的に総合学習で教材

活用できる構想を示した点である。また，中学校以上の地理学習において，身近な地域の調査は，低調であった。加え，これまでは，教科学習と総合学習の接続・連携は，強調されてきたものの，やや具体性に乏しかった。これまで，例示のあった環境，国際理解，情報，健康・福祉をテーマとする学習活動が，多く実践されてきたが，どの教科学習の内容が活かされているのか，あまり表面化されていなかった。何となく，多様な教科学習の成果が活かしているのだろうといった程度にすぎなかった。その点の払拭に，今回の単元構想は，役立ったものと考えられる。

有効性は，身近な地域の観光実態を認識させた上で，他地域との関係性を模索しながら，具体的な観光戦略計画を提案した点にある。すなわち，地域間比較することで，なぜ，観光客の入り込み数が，江別は少ないのか浮き彫りとし，その解決策を探る方向性を明確にした。その上で，他地域（札幌・小樽）を訪れる観光客を江別へ，どのように誘引できるのか着目させた。また，その実現に向け，観光資源の関係性に手がかりがありそうなことを示唆した。

今後の課題として，もっと詳細な部分まで踏み込み，観光戦略を考えさせる必要がある。実際の観光客の選択判断には，旅行費用，旅程などといった他の要素も欠かせない。こうした点を含め考えることで，観光戦略の現実性が高まり，探究的な学習活動の有用性が増すものと考えられる。

付記

小稿の内容は，2017年度北海道地理学会春季学術大会（於 北海学園大学）において口頭発表した。

文献

- 1）菊地達夫（2016）：中学校地理・総合学習における歴史的建造物群を活用した授業開発の視点，『苫小牧駒澤大学紀要第31号』，pp. 75-87.
- 2）寺本潔・澤達大編（2016）：『観光教育への招待』ミネルヴァ書房.
- 3）寺本潔（2017）：観光産業を支える情報のかかわり－函館市立弥生小学校の実践を通して－，『小学社会通信まなびと』，教育出版，pp. 4-9.